

ふ社の安和抄  
初編  
下

13  
3167  
3





あま成 漸ふるもとみくまはるゆき。た次を糸いとをきき  
えれば年としのころ二十むろりのおんよふた男おとこか  
まじくそあくみかちよまらぬとの入風かぜ懐なごふみの  
もとうはねく。はねざらあふふさうぐたさう  
あが。もとう樂あそびと揺かるとさう人ひとおのそのさ  
より是これもあつた風の若男わかおとこお舟ふね所ところふとさ  
の風呂ふろ一ひとたづみ成なりのせき。この葉はやふ入いる  
るより。ぐんぐんの男おとこと成なりをそ一ひと是これは山さんお物もの。あつる

あま来條きたじょうと糸いと「イヤチ風雅ふうがさぬ。是これはぐんぐん。モト解かせ中  
と。おまじとがけは病やま氣きで内うちへ入いりてあつと受うけ中ちゆうとが  
堀ほりの月つきその成なりとたつ実みのあつりんと糸いと「アサお小こまじと  
伏ふしがあつてひねつとあうへ出いりけ中ちゆうとこのさ。ア持もち合せと  
いさあかんまじと「山やまへ入いりてあつと風かぜ「志こころはけ者ものはあそれ  
久ひさ松まつ「ハ百ひゃく音ねや金巴きんぱ樓ろうで。おとさうさるころちつちが後あと不  
あふりのハ西にし給たまくらあやアありの中ちゆうとめ入いりてあつと後あと不  
時ときおあけけるのお世よけへハ「モト浮うき世よへは危あや角かく金かねのるりこ



美酒  
一壺



本らし  
 酒子  
 丁度  
 あり  
 百草の  
 長考  
 あり  
 酔  
 ころ  
 生

酒子の見











文亭  
一軒



やあを  
堀の内  
くま子  
孝子  
ゆ  
ゆ

移入  
唯  
まぶ  
の



御新館  
寸

右の  
下









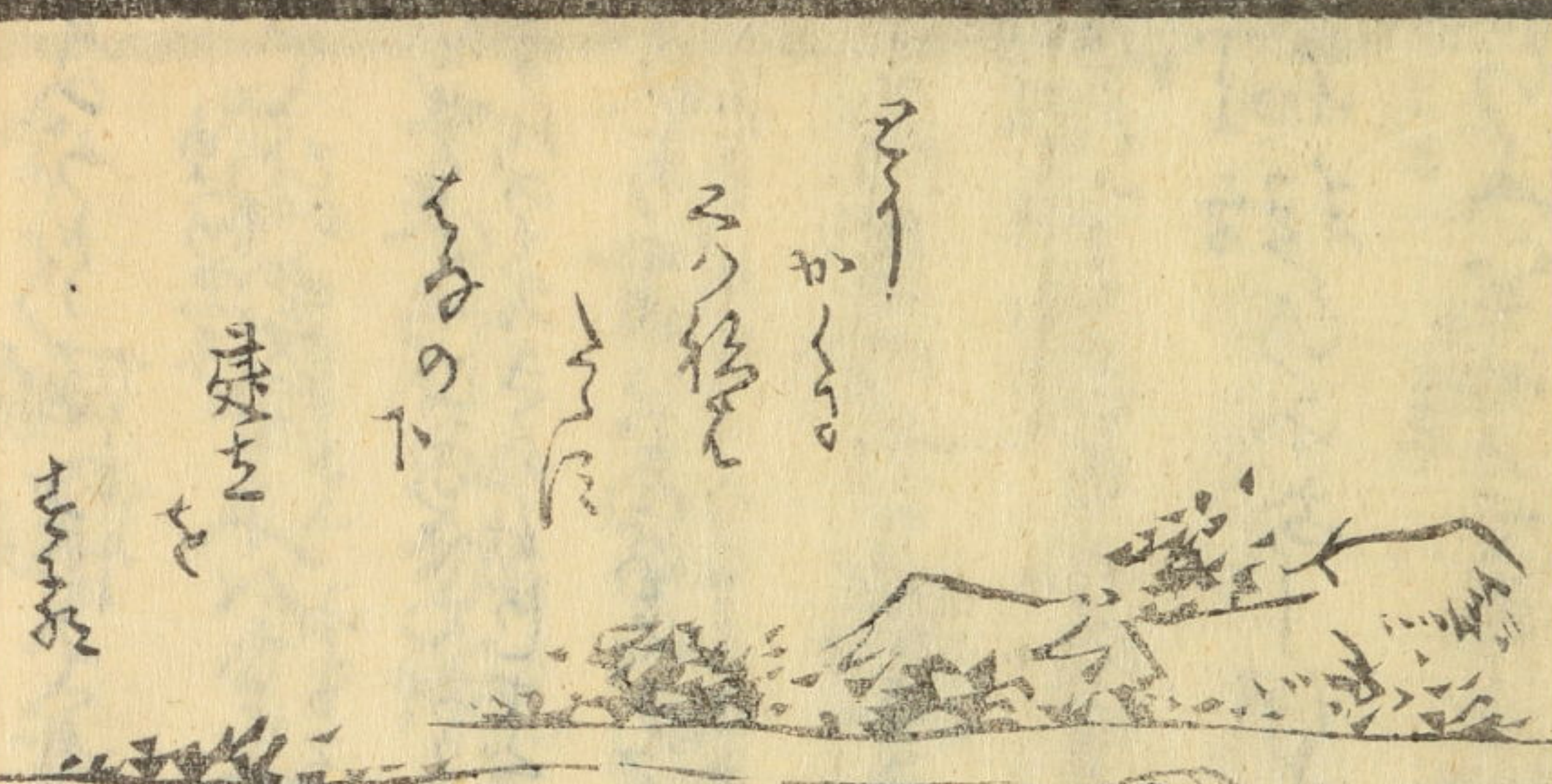
あつた下



あつた下

あつた下

あつた下



あつた下

あつた下

あつた下

あつた下

あつた下

あつた下

あつた下



あつた下

あつこつとつりつりつり



出傍題目の奇持

佛と賣ぐいの及ん傍

街道よりまうりて。相中の及とゆけば。あ例小菰延

まどが志をきて。糸猪のく小鏡とぞ入。あくのを食

ども「<sup>盲</sup>目<sup>目</sup>」<sup>目</sup>のあまのぬりらる。一めんらぞ

さうませ「<sup>目</sup>目<sup>目</sup>」<sup>目</sup>のあまのぬりらる。一めんらぞ

はんぢう「<sup>目</sup>目<sup>目</sup>」<sup>目</sup>のあまのぬりらる。一めんらぞ

あもいさませぬら。ひりたくて。あまのぬりらる。一めんらぞ

あ惹悲ふ一鏡<sup>目</sup>のあまのぬりらる。一めんらぞ

そくて下さるませ「<sup>目</sup>目<sup>目</sup>」<sup>目</sup>のあまのぬりらる。一めんらぞ

あもいさませぬら。ひりたくて。あまのぬりらる。一めんらぞ

あもいさませぬら。ひりたくて。あまのぬりらる。一めんらぞ

あもいさませぬら。ひりたくて。あまのぬりらる。一めんらぞ

あもいさませぬら。ひりたくて。あまのぬりらる。一めんらぞ

あもいさませぬら。ひりたくて。あまのぬりらる。一めんらぞ





笄 石玉未分時

憂心轉相悲

漸々通大道

吉 華發應殘枝

笄は石玉未分の時

いまだ分たざる時とて

俗小中まのの

の屍子玉とやまやうな

りので石玉と云屍子玉が

石のやうふあつて。ふつてもつてもうなむを

わつてあつてあが。いまだ分たざる時むらし憂心とら

出家の屍子玉が。この外わつてあつて懸んごら

こがあつて。憂心轉相悲。これをまよめるのあつて

とつてえれ。まよる屍のうらまがあつてあつて

屍にぬけて燈あつても屍がまよつてとら

米屋の屍酒やの屍らうくの屍がらゆゑみふ

はいても。屍うらまをげて。屍の仕舞ハ。屍うら

かひけひば。なうらなとら入身のうらまを

漸々大道通とある。後あは仕合がむいて来て

かの屍子玉がとけて。文使の及がむいて





あつちの  
下



あつちの  
下

〇十七

あつちの  
下

あつちの  
下

あつちの  
下

あつちの  
下

あつちの  
下

あつちの  
下

あつちの  
下

あつちの  
下

あつちの  
下





中のしずかきも。さういふおののふちうのいふもいふ。
 さういふおののふちうのいふもいふ。
 あつら丸。色は修造のけつう。きんぐびやふふさんけいの人ひきまき。
 一面をまわりの。同中より。さういふもいふ。
 りのふとをうり。さういふもいふ。
 おののふちうのいふもいふ。

正

け編先けあめく。さういふもいふ。
 ざういふもいふ。
 出板り。さういふもいふ。

誹語堀之内詣下之巻終

劫き さらなきいふ 夕 飛去雲し  
 か 恨し 若く 嬌き 方い 定まらぬ  
 カワケト 三万二 如く  
 せいの せいの 湖 研ニ  
 せいの せいの 合 十ニ

